慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

第61回東医体
夏季部門 連覇途切れる

第61回東日本医科学生総合体育大会（東医体）夏季部門は8月1日から15日にかけて開催された。

東医体は、各競技の順位に応じたポイントが大学に付与され、その合計点で総合優勝校を争うシステムとなっている。今大会において我々は、2競技で優勝、5競技で準優勝、14競技でポイント獲得した。夏季部門1位は90・5ポイントの筑波大学であり、本塾医学部は群馬大学と共に67・5ポイントで同率2位となっている（8月20日 第61回東医体福島県立医科大学医学部運営本部調べ）。筑波大学との差は23ポイントと引き離されており、冬季種目のアイスホッケーやスキーでの追い上げが期待される。

紙面では、好成績を収めた競走部、硬式野球部、硬式テニス部、馬術部、空手部、水泳部、ヨット部、端艇部、ゴルフ部を特集した。個人戦の優勝・準優勝者に対するインタビューは来月号で紹介する。

選手たちの熱く淡くほろ苦いひと夏の1ページを読者の皆様にお届けすることができれば幸いである。（5年　辻田真秀）

部活	性別	1位	2位	3位
陸上	男子	東北大学	筑波大学	新潟大学
	女子	秋田大学	筑波大学	東京大学
硬式野球		信州大学	東京医科大学	獨協医科大学
テニス	男子	福島県立医科大学	筑波大学	慶應義塾大学
	女子	横浜市立大学	群馬大学	慶應義塾大学
ソフトテニス	男子	秋田大学	信州大学	群馬大学
	女子	旭川医科大学	山梨大学	東京医科大学
卓球	男子	東北大学	昭和大学	東京慈恵会医科大学
	女子	秋田医科大学	岩手医科大学	昭和大学
バレーボール	男子	筑波大学	群馬大学	福島県立医科大学
	女子	女子医科大学	群馬大学	埼玉医科大学
バドミントン	男子	旭川医科大学	筑波大学	順天堂大学
	女子	秋田大学	旭川医科大学	群馬大学
サッカー		千葉大学	群馬大学	新潟大学
バスケ	男子	群馬大学	慶應義塾大学	秋田大学
	女子	秋田大学	筑波大学	昭和大学
柔道		東海大学	岩手医科大学	新潟大学
剣道		自治医科大学	福島県立医科大学	旭川大学(同率2位)
弓道		東京医科歯科大学	秋田大学	信州大学
空手	男子	山形大学	慶應義塾大学	札幌医科大学
	女子	岩手医科大学	獨協医科大学	弘前大学
水泳	男子	日本医科大学	慶應義塾大学	東北大学
	女子	慶應義塾大学	東京医科大学	自治医科大学
ヨット		千葉大学	順天堂大学	慶應義塾大学
ボート		東京大学	慶應義塾大学	山梨大学
馬術		信州大学	日本医科大学	東京女子医科大学
ハンドボール		順天堂大学	旭川医科大学	山形大学
ゴルフ	男子	筑波大学	慶應義塾大学	群馬大学
	女子	慶應義塾大学	獨協医科大学	筑波大学

競走部
男子総合4位

8月11・12日に、秋田県立中央公園陸上競技場にて東医体陸上競技が開催され、男子部は総合4位となった。

男子部は昨年の東医体で惜しくも準優勝となり、本年は優勝奪還をかけた戦いであった。

気温35度を超える酷暑の中、長距離において、道振瑞葵君（6年）が3000mで準優勝を果たした。

短距離においても、宮澤剛史君（4年）が200m準優勝、400m準優勝と好成績を残した。

また、投擲種目においても、北村拓也君（2年）がハンマー投げ優勝、千田晋太郎君（5年）がハンマー投げ3位となった。特に北村拓也君は昨年度1年にも関わらず決勝に駒を進めており、順調な成長ぶりが伺えるとともに今後の活躍が期待される。

優勝は出来なかったが、ご覧の通り優秀な選手が揃っている。来年こそは、その強さを存分に発揮し、王座の奪還を果たしてほしい。（5年　辻田真秀）

競走部集合写真

硬式野球部
ベスト8入り

野球部では、医学部リーグでは良い結果が残せなかったので、その借りを東医体で返すという考えの下に練習内容を一新した。そして部員一人一人が出せる最大限の力をチームに捧げる意識で1年間やってきた。

ベスト8をかけた順天堂大学戦、慶應は先制を許すと相手のペースに飲み込まれ、一時はコールドゲーム寸前まで追い込まれた。それでも6回攻撃時、服部（3年）がタイムリースリーベースを放つなどして1点差まで迫ると、2番松村（5年）の同点タイムリー、さらに3番主将の岡田（5年）がエンドランを仕掛け、タイムリーツーベースで逆転に成功した。

その後は一進一退の攻防が続き、延長戦に突入した。

守る慶應は投手服部（3年）が気迫のピッチングで2失点に抑えた。その裏、3番主将岡田がこの日5打数5安打となる同点タイムリーを放つと、勢いそのままに押し出しサヨナラ死球で、11―10と劇的な試合を制した。

野球部は今年で創部100年という記念すべき年であるが、100年の伝統にこの1年の糧を加え、また新たにスタートしていきたい。（4年　齋藤直宏）

野球部集合写真

硬式テニス部
男女ともに3位

テニス競技は、男子はダブルス2本シングルス3本の計5本、女子はダブルス1本シングルス2本の計3本で行う。

硬式テニス部男子部は5年藤原主将の下、前年度優勝校として連覇をかけて臨んだ。3回戦で対戦した東京大学は難敵であったが、ダブルス6年二宮5年稲葉ペアの勝利で勢いをつけた。4年間瀬もプレッシャーのかかる場面で勝ち切り4回戦進出を決めた。準決勝では強豪福島県立医科大学と熱戦になり、3年松川の奮闘もあったが、全体では力及ばず北里大学との3位決定戦に回った。

3位決定戦はシングルスで先勝、ダブルス5年青木4年大塚ペアも強烈なスマッシュを打ち続け勝利した。

4年小野田が相手校の1番手相手に健闘し、接戦となった5本目を5年藤原が勝ち切り銅メダル獲得となった。

女子部は一部リーグ全勝優勝の勢いのまま、4年横山主将の下優勝を目指した。帝京大学との初戦は、4年横山2年平野のダブルス、6年高野のシングルスで相手を圧倒、無事勝利した。4回戦では昨年敗れた北里大学を相手にリベンジを果たした。

準決勝では横浜市立大学と対戦した。ダブルス4年横山1年渡邊ペアは、ファーストセットを落とすもファイナルセットで勝利をあげた。シングルスでは2年尾崎が、2日間、計11時間に及ぶ壮絶なラリー戦となったが惜敗し、筑波大学との3位決定戦に回った。悔しさを残しつつも6年高野が勝利、2年尾崎も疲れを見せず勝利し、銅メダル獲得となった。

結果を謙虚に受け止め、来年度東医体優勝を目標にまた1年間精進して行く。（5年　松井優子）

硬式テニス部集合写真

馬術部
惜しくも入賞ならず

昨年は総合3位を獲得したため、昨年同様総合成績での入賞を目標としていた。しかし部員が5名と少なく、全種目に出場することはできないため、ポイントの高い馬場馬術団体戦に絞って力を入れた。

現在練習は主に土日だけで、馬に乗って練習できる時間は限られている。そのため、その中で集中して練習に取り組んできた。馬場馬術では馬と息を合わせることや騎乗時の姿勢も大切なので、練習時のビデオを確認し毎回自分達の走りを省みた。

残念ながら総合成績では6位で入賞とはならず、力を入れていた馬場馬術団体戦でも思うように力を発揮できなかった。しかし、三守賢（6年）は障碍飛越個人戦で準優勝を果たすことができ、有終の美を飾ることができた。また、1年生も初の試合出場にも関わらず、自分の持ちうる力を発揮し、来年が期待できるような結果を残した。

今年の東医体での悔しさをバネにして、普段の練習に力を入れたい。後進の育成にも力を注ぎ、今年は部員の人数の関係で出場できなかった障碍飛越団体戦に来年は出場して、優勝できるようにしたい。（4年　齋藤直宏）

馬術部集合写真

空手部
男子総合準優勝

8月11日12日に、山形市総合スポーツセンターにて東医体空手道競技が開催され、男子部は総合準優勝を果たした。

空手部は昨年自治医科大学に敗れ、それまで3年間続いていた連覇記録を止められてしまった。今年は優勝杯の奪還に向け、昨年度よりもさらに厳しくより実践にむけたトレーニングを積んだ。その結果、春季関東医科歯科大会においては団体組手・団体型・個人組手のいずれも優勝する程の実力を有していたにも関わらず、東医体では山形大学にわずか0・5ポイント及ばず準優勝となった。

種目別の成績としては男子団体型で優勝、男子個人組手において石田典仁（6年）と中山晃（3年）が3位、女子個人型において鈴木理香子（4年）が3位であった。

今回はあと一歩及ばず、空手部にとっては満足のいく結果ではない。しかし本年は歴代最多の新入部員を獲得しており、今後さらなる総合力の向上が見込まれる。彼らの力を底上げし、来シーズンに向けて空手部のさらなる飛躍に期待したい。（4年　齋藤直宏）

空手部集合写真

水泳部
女子優勝、男子3位

最初の競技であるメドレーリレーは男女共に表彰台が期待されたが結果は4位にとどまった。続く個人種目も女子こそ期待通りの成績であったが、男子は悉く予想を下回り、チームに絶望ムードが漂っていた。そんな流れを変えたのが北村愛花（4年）の100m自由形決勝であった。大会新記録による優勝でチームに勢いをもたらした。

初日の最終種目のフリーリレーは男女ともにここで離されてしまっては優勝争いから離脱するという背水の陣の中でのレースであったが、結果男子は大会新記録による、女子は2位以下に大差をつける優勝をきめた。

2日目の個人種目は午前中こそ奮わない結果であったが午後に巻き返し、全体としてはほぼ予想通りの結果で終え、男女ともに最終種目のフリーリレーで勝てれば優勝という絶好の位置につけた。女子のフリーリレーは大会新記録を3秒更新する圧巻のレースで危なげなく優勝を決める。この流れに続きたい男子であったが、結果は惜しくも3位。男女アベック優勝には一歩届かなかった。

水泳部は「挑戦者として」を今シーズンのチームの共通認識としても、3年前の男女アベック優勝の再現、そして「水の王者慶應」復活のために選手マネージャー問わず一年間全てをかけて挑戦し続けてきた。それが今回の優秀な成績に結びついたと主将の松下友哉（4年）は語る。（5年　ハズラ　デバブラタ）

水泳部集合写真

ヨット部
団体戦3位

大会初日は朝から霧がかかる軽風のコンディションだった。第1レースは昨年度優勝校の東北大学が飛び出した。順天堂、慶應、東邦、千葉と続き、団体戦は混戦模様となった。続く第2レースは順天堂大学が魅せ、団体戦では順天堂大学が首位に立った。第3レースは、風が落ちていく中で行われた。団体では千葉大学がリザルトをまとめたが帰港後の審問で失格艇が出てしまい、団体戦初日は順天堂大学が首位となった。

風を待って行われた第4レースでは千葉大学が首位に。団体戦スコアは千葉大学に続き2、3位でまとめた順天堂が点差を広げることとなった。続く第5レース、フィニッシュでは千葉大学が圧巻の1、2フィニッシュを決めた。第6レースではスタートの混戦の中、慶應大学の横山・吉田組が首位に立った。横山・吉田組はトップを守りきり、続く2番艇も5ポイントにまとめた慶應が団体戦で大きく躍進した。順天堂大学はこのレースで崩してしまい首位転落となってしまう。

そして風も波も上がったコンディションの中、第7レースは順天堂大学が僅差で首位を取り返す。また慶應大学の井出・金組、横山・吉田組も3位、4位とまとめ、団体戦で大きく躍進する。風があがり、波も相当ラフになってきた中で最終レースが行われ、首位を取ったのは千葉大学だった。慶應義塾大学は3位で、強風の走りなど随所に見せ場を作りメダルを勝ち取った。（5年　ハズラ　デバブラタ）

ヨット部集合写真

端艇部
惜しくも優勝逃す

端艇部は今年の東医体に向けて、各種目優勝、そして総合優勝という目標を掲げてきた。具体的には、端艇は相手よりも早くゴールすれば勝つ競技なので、練習のときから自分たちの漕ぎそしてタイムにこだわってきた。

結果は、男子はダブルスカル優勝、新人フォア優勝、シングルスカル3位と例年に比べよい成績であった。女子も健闘した。

しかしながら男子フォアが決勝にいけず、東大との差が浮き彫りとなり、総合2位であった。優勝するにはこの対抗フォアでの勝利が必要であることを再確認した。来年はこの種目で優勝し、総合優勝をつかむことを目指している。

東医体を終えて、小池久貴主将（4年）は「今年は1年生そして5、6年生の活躍につきる。異なる学年で一緒に乗ることが多く、引っ張りひっぱられでみな頑張ってくれた。」と振り返った。

また現在でも部員募集中で、途中入部大歓迎のようだ。（3年　諏訪弘治）

端艇部集合写真

ゴルフ部
悲願の女子部優勝

慶應のゴルフ部は東医体優勝筆頭候補とされながらも、惜しくも2位という結果が近年続いていた。そして本年、とうとう女子部が優勝を果たした。

ダブルエースの荒木、武山を中心に万全の戦力で臨んだ女子部。前年度優勝の獨協医科大学との一騎打ちが予想された。前半は全員まずまずのスコアで優勝も狙える位置につけた。後半に入ると獨協の選手がスコアを上げているとの情報が入り、雲行きが怪しくなった。しかし、そこで主将荒木が1アンダー35の自己ベストスコアを叩き出し一気に形勢逆転。僅差の戦いを制し、女子部が悲願の優勝を果たし、主将荒木は個人優勝を達成した。

男子部もエースの廣瀬を中心にここ数年のうちでは最高の戦力を揃えて臨んだ。初日上位4人平均70台の好スコアで発進するも、まさかの群馬大学に次ぐ2位。台風の影響により2、3日目は暴風雨の中競技は行われた。2日目には筑波大学に抜かれ、まさかの3位に転落した。粘りのゴルフを見せるが逆に筑波大学との差を広げられ追いつけず、最終ハーフでなんとか群馬大学をかわして2位に滑り込んだ。エースの廣瀬は8位入賞となった。（4年　大政遥香）

ゴルフ部集合写真

鑑賞知来

2017年の訪日外国人数は2869万人を数え、今年上半期では既に1500万人を超え年間3000万人突破が確実視されている。訪日外国人急増の要因はビザ発給要件の緩和、SNSを介した宣伝効果や為替の円安傾向などがあげられている。インバウンド消費による経済効果に目を奪われがちではあるが、一方で東京オリンピック・パラリンピックを控え、医療分野でも外国人受診者の増加に備えた体制づくりが厚労省を中心に進められている。

訪日・在留外国人患者が安心・安全に受診できるよう医療機関を整備する目標を掲げ、2013年に日本医療教育財団が運用する「外国人患者受入れ医療機関認証制度（JMIP）」がスタートし、現在全国で45医療機関が認証を受けている。

私どもの病院名称〝国際親善〟ゆえに、「先生の病院はどのような国際親善事業をしているのですか?」と尋ねられることがしばしばある。病院ルーツをたどれば、幕末1863年（文久3年）に横浜山下町の外人居留地に外国人が開設したYokohama Public Hospitalではあるが、現在は胸を張ってお答えできる国際的な事業をしている訳ではない。

近隣の県営団地に中国人コミュニティーがあり、NPO医療通訳サービスの支援のもとに年間100件を超す中国人を主とした外国人診療を行ってきた多少のノウハウがあるので、昨年日本医療教育財団による外国人患者受入れ環境整備事業に参画し、補助金をもとに体制整備に着手した。その内容は多言語対応ツールや医療通訳サービスの利用による多言語会話環境の整備、院内案内表示やウエブサイト、説明・同意承諾書など院内文書の多言語化、院内各部署の会話力の把握などで、診療手順に沿ったマニュアル化が求められる。来春のJMIP受審に向けてこれらの体制を整え、病院名に恥じない病院機能を整えたい。

（国際親善総合病院病院長　安藤暢敏　50回）